

# 親鸞における学の特質

寺川俊昭

『教行信証』が開顕した浄土真宗、即ち浄土真実教行証と規定される仏道が、誓願一仏乘という強烈な自己理解をもつことは、「行巻」の一乗海釈における、

「ただこれ、誓願一仏乘なり。」(『真宗聖典』一九七頁)

という、断乎たる響きをもつ一句によっても明らかである。この浄土真宗なる仏道の自覚内容の最も積極的な、そして最も鮮明な表白を、私は「行巻」末尾に展開する、あの、

「敬いて一切往生人等に曰さく、弘誓一乗海は、無碍、無辺、最勝、深妙、不可説、不可称、不可思議の至徳を成就したまえり。何をもつてのゆえに、誓願不可思議なるがゆえに。」(『真宗聖典』二〇一―二頁)

という、高らかな調子を以て語られる一乗海の嘆釈に、そして殊にそれに続く真宗の大綱を総括するような骨太の文章、

「おおよそ誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。

その真実の行願は、諸仏称名の願なり。

その真実の信願は、至心信染の願なり。

これすなわち選択本願の行信なり。

その機は、すなわち一切善悪大小凡愚なり。

往生は、すなわち難思議往生なり。

仏土は、すなわち報仏報土なり。

これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。

『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意なり。〔真宗聖典〕二〇三頁

に、聞くのである。

この真宗大綱を語る文章の意味するところについては、『大谷大学研究年報』第三十一集に、「浄土真宗の法印」と題して私の了解するところを記したことであるが、この文章において親鸞が、誓願一仏乘なる浄土真宗がそこに現前する根本事実を選択本願の行信と抑え、更にこの選択本願の行信という信仰的自覚の内容乃至は契機を、機・往生・仏土の三点について吟味した後、それを総括するように、

「これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。

『大無量寿経』の宗致、他力真宗の正意なり。」

と、恰も石に刻みつけるような、ある明晰さをもった簡潔な言葉を記している。この二文に改めて注意したのである。

誓願一仏乘としての他力真宗の正意が、ここに誓願不可思議・一実真如海として、凝集的に浮彫りにされている。

この誓願不可思議という親鸞独自の用語の意味については、既に『歎異抄の思想的解明』、「浄土真宗の法印」〔大谷大学研究年報〕三十一集、「誓願不思議―親鸞聖人の宗教的自覚の特質―」〔親鸞教学〕十八号〕において推求した通り

であるが、小論の最初に引文した一乗海の嘆積によっても知られるように、誓願不可思議とは、一実真如海を衆生の上に実現させる道理であり、一実真如海とは、誓願不可思議を根拠として衆生の上に実現する功德である。一応このような基本的了解を踏まえて改めて親鸞の著作を見る時、私は親鸞がある大きな情熱と、確信と、そして関心とをもつて、この一実真如という言葉で表わされる無上仏道の根本的自覚を反復表明することに、驚くのである。

例えば『教行信証』の「教巻」冒頭に、いわゆる二廻向四法として浄土真宗の大綱を簡潔に頭揚する親鸞の言葉を聞こう。

「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向について、真実の教行信証あり。」(『真宗聖典』一五二頁)

この文章で親鸞が語ろうとすることの大意は、もし衆生が、廻向の法である本願の名号に値遇し帰することができたらば、その時直ちにその名号に帰した衆生の上に、往生浄土、還來穢国という二つの方向をもった運動が始まってくることとなる。そのようにして実現する往生浄土という意味と方向をもつ人生を支える契機として、真実の教、行、信、証の四法を挙げることができる。ほぼこのように了解することのできるこの文章について(詳細は『大谷大学研究年報』三十一集所収「浄土真宗の法印」参照)、今私が注意したいのは、この真実の教・行・信・証の四法に、親鸞が見出した意味である。その重要なものを、ここに挙げてみよう。

真実教 一乗究竟の極説

速疾円融の金言 (『真宗聖典』一五四頁)

真実行 円融真妙の正法

至極無碍の大行 (『同上』一九三頁)

円融至徳の嘉号 (『同上』一四九頁)

真如一実の功德宝海〔同上〕一五七頁)

眞実信 証大涅槃の眞因

極速円融の自道

真如一実の信海〔同上〕二二一頁)

眞実証 無上涅槃の極果〔同上〕二八〇頁)

一読して私は、円融、真如一実、無上涅槃という言葉が、ある意味で教行信証の四法を貫いて、そのすぐれたはたらきを表わす言葉として使用されていることに気づく。これらの言葉の意味するものの探究は、前述の諸論文にゆずって、ここではただ一つ、円融について親鸞がその了解を語るところに耳を傾けよう。

「いま、一乗ともうすは、本願なり。円融ともうすは、よろずの功德善根みちみちてかくることなし。自在なるころなり。無碍ともうすは、煩惱悪業にさえられず、やぶられぬをいうなり。眞実功德ともうすは名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如来なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり。(中略)

「功德」ともうすは、名号なり。「大宝海」は、よろずの善根功德みちきわまるを、海にたとえたまう。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。」

〔一念多念文意〕『眞宗聖典』五四三―四頁)

この親鸞の了解によってみても、円融といい、真如一実といっても、それは無上涅槃乃至はそのはたらきを語る言葉であることは、疑問の余地なく明らかであろう。しかも注意すべきことは、これらの円融乃至は真如一実という言葉

で無上涅槃のはたらきを語るに当たって、親鸞はそれを単なる理念として、もしくは教理の思索として語っているのではないということである。そうではなくて、親鸞の体験に自証された事実として、これを語っているのだといわなければならないもののあることに、われわれは注意しなければならないのであろう。

もとより親鸞がそれによって一人の純潔な仏教者であり得、またそこに立って自己の信念として仏教を語り得た根源的体験は、選択本願の行信である。その際、この選択本願の行信が、一つの根源的な法への覚醒として、その内面に自証しているものを、その発起の縁に注意して尋ねるならば、『願生偈』を直訳的に和讃したあの、

「本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし。」(『真宗聖典』四九〇頁)

がいみじくも浮彫りにしたように、如来の不虚作住持功德そのものであったというべきであろう。この功德を如何に了解したかを語る親鸞の言葉と、上掲の「行巻」に真宗の大綱を総結する中で、選択本願の行信の自証するところを、誓願不可思議・一実真如海と顕揚する言葉とを反復説誦して、私は確かにいうことができる。即ち親鸞には、その選択本願の行信において、親鸞のいわゆる無上涅槃の功用、即ち真如一実の鮮烈な体験的自証があったのであろうと。勿論、煩惱具足の身をもって、無上涅槃をさるといっているのではない。そうではなくて、もし『歎異抄』の石に刻みつけるような格調高い表現によるならば、煩惱具足の身の虚妄性をくつきりと浮彫りにするような明晰さをもって、念仏の真実性ははたらくのであるが、その念仏に帰した自覚に、圧倒するような力をもって現前する真実清浄性に感動する親鸞の、聞思なる根源的思索が、遂にそれを円融し真如一実する無上涅槃の功能だと、深々と自証することとなったのであろう。そしてこの体験の自証に立って、自らが選択本願の行信の獲得という形で帰入した浄土真宗

を、満々たる自信をもって誓願一仏乘、即ち如来の誓願によって実現し保持される無上仏道と断言することができたのに違いない。しかもこの本願の行信における一実真如海への帰入という自証こそが『教行信証』を創造した親鸞の思索を生み出した大地であったというべきではあるまいか。

二

極めて個人的な経験を、ここで申し述べてみたい。それは凡そ仏教の学、言葉の本来の意味で仏教の学、即ち仏教を研究対象とする学に簡んで、学ぶ者に仏道を開示するような質をもつ仏教の学とは何であり、また如何にして可能かという、仏教の学の根本についての問いかけを私に促した、一つの言葉との遭遇である。それは真諦訳の『撰大乗論・世親釈』冒頭にある、次の一句であった。

「論に曰く、撰大乗論は即ちこれ阿毘達磨經にして、乃ち大乘修多羅なり。」

釈して曰く、この言は何の義に依り、何に因りてしかも起こるや。一切所知依の甚深広大なる諸法の実性に依る。〔『大正蔵』三十一卷一五四頁〕

もとより『撰大乗論』の全体系におけるこの命題の意義なり意味については、私は何も知らないに等しい。全く自分流に読むならば、この一文の訴えるところは、私に次のように響いて来る。即ち『撰大乗論』は、論家無著の製作にかかる論であるけれども、しかもそれは阿毘達磨を内容とする經典であり、しかも大乘の經典であるというに価する質をもつものである。いい換えれば、仏弟子無著論師の製作した一つの論であるけれども、大乘の阿毘達磨經として、仏説とその権威を等しうするとの、強い自己主張を先ず提示したのである。このような強烈な主張が、一体如何にして成立し、承認せられるのであるか。それは、『撰大乗論』に展開する如何なる思索も、甚深広大なる諸法の実性、即ち法性真如の道理に適い、それを根拠とし、それ故に法性の世界を衆生に開示し、また法性の世界に衆生を還帰せ

しめる功能をもつからである。世親の解釈は、このように無著の主張を弁証したのであろう。

仏教初学の頃、私はこの文章に遭遇して、「依一切所知依甚深広大諸法実性」という一句に、非常に強い感銘を覚えた。もし仏教の学が、まさに仏教の学というに価する実質をもつべきであるならば、この一句にいみじくも表わされる確信が、大乘の阿毘達磨としての仏教の学を支える根拠とならねばならないのではないかと。ことは真宗学、即ち親鸞が真実教と仰いだ『大無量寿経』の教説によって開かれた知見、即ち選択本願の行信に立って、その行信に自証せられる真理内容を道理を以て開顕して行く真宗教学にあっても、全く同じではないのか。今、『教行信証』を製作した親鸞の思索の独自性と方法を尋ねようとする私に、『撰大乘論』のこの命題と、真如一実という言葉をはじめ幾つかの言葉をもって無上涅槃の功能を語る親鸞の言葉とが、二重写しになって迫って来るのを感じる。恰も無著・世親のような、大乘仏教を背負って立った論師達の思索の質に、『教行信証』となって結実した親鸞の思索は到達し、それと比定することができるような質の高みを保持していたのではなからうか。その意味で、『教行信証』は、真に大乘の論書というに価する質を有する、誓願一仏乗の真理内容を開顕した論である。こういったものを、私は強く感ずる。いうまでもなく親鸞の了解にあつては、諸法実性というも、一実真如というも、共に涅槃を表わす同義の言葉であるからである。

「大涅槃ともうすに、その名無量なり。くわしくもうすにあたわず。おろおろ、その名をあらわすべし。「涅槃」をば、滅度という、無為という、安樂という、常樂という、実相という、法身という、法性という、真如という、一如という、仏性という。仏性すなわち如来なり。」（『唯信鈔文意』、『真宗聖典』五五三―四頁）

### 三

さて、改めて問うならば、『教行信証』を創造した親鸞の思索の方法は、親鸞自らが語るように、聞思として理解

されるべきである。

「誠なるかなや、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師積、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。」〔総序〕・『真宗聖典』一五〇頁

この聞思というまでもなく、聞法に始まる思索ということである。いわば聞法において値遇し、体験として自証したその真理内容を、自覚の明るみにまで開顕して行くという思索である。この親鸞の聞思について、私は先ず二つのことに注意したい。第一は、上掲した「行巻」に真宗大綱として表白されているものが、親鸞の学の成果の総括的な表現であるとするならば、その核心が誓願不可思議・一実真如海という言葉でいみじくも表わされていることから知られる通り、親鸞の聞という行為は、恰も世親が「依一切所知依甚深廣大諸法実性」と解明したように、一実真如という法性といふ実相といわれる実在の深みに触れ、到達していたのだということである。そしてそこに始まる親鸞の思索が、よくこの一如に適うという質をもったものではないか、ということである。そして第二には、このことの全体が、『大無量寿経』の宗教」としていることが告げているように、『大無量寿経』の教説を聞くことによって開示された世界であるということである。いうならば、一実真如海にその自覚の核心というか、源泉をもつ他力真宗とは、『大無量寿経』の教説の聞思によって実現する自覚の世界だということである。

恰も「行巻」のこの表白に呼応するかのようには、「総序」は、

撰取不捨の真言（本願の功用）

超世希有の正法（本願の成就）

を、聞思して遅慮することなかれと、仏教の学徒としての親鸞の基本的姿勢を鮮烈に示し、かつわれわれに勧めてい

る。いうならば親鸞は、真実教と仰いだ『大無量寿経』に對するに、聞思という方法をもつたのであり、しかもこのことが、よく『大無量寿経』自身の求めるところに適うたのである。例えば流通分の教説を聞こう。

「仏、弥勒に語りたまわく、それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん。当に知るべし。この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功徳を具足するなり。このゆえに弥勒、たとい大火ありて三千大千世界に充滿せんに、要ず当にこれを過ぎてこの経法を聞きて、歡喜信樂し、受持誦誦し、説のごとく修行すべし。所以は何ん。多く菩薩ありてこの経を聞かんと欲えども得ること能わず。もし衆生ありてこの経を聞けば、無上道において終に退轉せず。このゆえに应当に専心に信受し持誦し説行すべし。(中略)

如来の興世、値い難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、これもまた難しとす。もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし。このゆえに我が法、かくのごとく作し、かくのごとく説き、かくのごとく教う。应当に信順して法のごとく修行すべし。」(『真宗聖典』八六一七頁)

もとより親鸞における聞の成就は、法然の教説との値遇においてであった。この出来事によって聞かれた廻心を、親鸞自らが、

「雑行を棄てて本願に歸す」

と表白していることから知られるように、この時親鸞は、身は選択の本願に歸して念仏する念仏者と転成し、心は長く無明の闇の中にさ迷うた者が、初めて尽十方無碍光の世界に蘇ったとの大きな覚醒を得たのであった。この体験に立って、恐らく親鸞は『大無量寿経』のいわゆる願成就の文が、自分自身の根源的覚醒もしくは廻心の原光景を語る教説であるとの、読経眼を得たに違いない。当然、願成就の文の眼目は、「聞其名号信心歡喜」の一句であると、深くうなづいたことであろう。私には、親鸞が『大無量寿経』の宗体を解釈して、

「如来の本願を説きて、經の宗教とす。すなわち、仏の名号をもって、經の体とするなり。」〔真宗聖典〕一五二頁  
と、『大經』の教説の体を名号に凝集させ、さらに先の流通分の教説を和讃して、

「たとい大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなうなり」〔同上〕四八一頁

と、覚者たる教主世尊の教説を聞くという聞法を、仏の御名を聞く、即ち聞名に凝集させて了解し表白している点に、親鸞の聞がどのような性格のものであったかを、まざまざと示されるような思いがする。

聞、覚者の教言を聞く。もし善導の類い稀な譬喩によるならば、釈尊の教言に発遣の声を聞く。のみならず、発遣の声を聞いたとは、直ちにそれは聞法する魂に響く招喚の声を聞くことに外ならない。その意味で親鸞における聞の成就である法然の教言との値遇は、教主世尊の教言に帰せられる発遣の声との値遇に外ならず、その教言が、十方恒沙の諸仏如来の、無量寿仏の威神功德の不可思議を讃嘆する言葉として、値遇した者を内面の本願招喚の世界に発遣するのであった。ここに親鸞が『大無量寿經』をもって、真実教と仰いだ所以がある。

教法との値遇、即ち聞の成就を縁として現前する廻心。この廻心をもし流転する生の突破と解するならば、この事実を淨心もしくは出世心の種子として問う『撰大乘論』のよく知られている一句、

「最も清淨なる法界より等流せる正しき聞薫習の種子より生ずる所なり。」〔大正藏〕三十一卷一三六頁

を、私は想起する。根源的覚醒としての聞法体験のもつ、この最清淨法界等流という質が、やがて具体的な聞法の体験＝廻心の感動の中で、西岸即ち「極楽無為涅槃界」よりの招喚の声として、一つの譬え、しかも極めてリアルな譬えとして、善導によって表白されたものではなからうか。そして、もしこれを同じ質の表白を親鸞に聞くならば、われ

われは直ちに『歎異抄』のあの感銘深い二文を想起すべきであろう。

「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなれることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。」(『真宗聖典』六二七—八頁)

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。」(『同上』六四〇頁)

この述懐に、私は親鸞が聞きとめた本願招喚の声の表白を聞く。そして、この発遣の教えに帰した者を根源に呼び覚ます招喚の声に即して、更にこの根源的覚醒を帰命尽十方無碍光如来と表白する念仏者の身の転成の事実即して、発遣する真実教の経体である如来の名号を表白するならば、それは親鸞のあの独自の名号解釈がいみじくも浮彫りにしたように、

「ここをもって、「帰命」は本願招喚の勅命なり。」(『行巻』・『真宗聖典』一七七頁)

とするとともに、その最も正確な了解を得たというべきであろう。換言すれば、真実教たる『大無量寿経』はその体仏の名号であるとは、自己の全てを挙げて本願の恩徳を讃嘆する諸仏善知識の言葉に値遇して、無碍光如来の御名を称念する者に成っていくと同時に、その御名に名号するもの、即ち一如真実の深みから名告り出るもの、それ故に一実真如海を衆生に開示し、また一実真如に還らしめるものを感得するのだというに外ならない。この感得を得た時、本願為宗・名号為体の『大無量寿経』は、真言即ち真如一実の言説として、速疾円融の金言として、その真実教たる所以を遺憾なく發揮することとなる。このように尋ねて来るならば、親鸞が聞成就の核心的事実を説く教言、「聞其名号信心歡喜」を解釈して、

「しかるに『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。」(『真宗聖典』二四〇頁)

というのは、この辺りの風光を語り告げているのではあるまいか。

#### 四

このような聞に始まり、聞に内容づけられた思索。一つのうなづき、一つの感動として現前する聞の体験内容を、自覚の明るみに道理をもって開顕して行く思索、これが『教行信証』を生み出した親鸞の学の方法である。この聞思は、当然そこに二つの側面をもつこととなる。一つは真実教との呼応であり、今一つはその聞思なる思索の全体が、一実真如の道理に適うという質をもつことである。これについて、親鸞は語る。

「与仏教相應」といふは、この『浄土論』のこころは、釈尊の教勅、弥陀の誓願にあいかなえりとなり。」（『真宗聖典』五一八頁）

とすれば、『教行信証』製作の源にあったものは、『浄土論』にいわゆる与仏教相應の志願であり、『教行信証』は『浄土論』に呼応し、その伝統に属する論書であるという性格を顕著にする。即ち自ら無量寿経優婆提舎という高邁な名のりのもとに、『無量寿経』の宗致である本願の因源果海を、論義をもって顕らかにした『浄土論』の思索と、その質を等しくするような性格を、『教行信証』はもつのだというべきこととなる。いわば聞思するというその思について、ここに論義問答という形を与え、これによって思索を具体化し、確実化するのである。

『浄土論』はいうまでもなく、偈頌と長行の二部よりなる。願生偈なる偈頌において、論師世親は「世尊よ」と、『大無量寿経』の教主世尊に応答しつつ、『大無量寿経』の教説に値遇して獲得された本願成就の一心を表白し、その一心帰命の信に開示された広大無辺際なる本願成就の浄土を、同じく『大無量寿経』の教説に基いて、二十九種功德莊嚴をして讃詠し、その安樂浄土に生らんとする願生心を、「普共諸衆生、往生安樂国」と表白して、本論たる偈を結ぶ。この『無量寿経』の教説の精髓を偈頌を以て讃詠する総説分を承けて、

「論じていわく、この願偈は何の義をか明かす。」

「いかんが観じ、いかんが信心を生ずる。」(『真宗聖典』一三八頁)

と問答を展開し、この問答論義という形をとったいわゆる解義分において、先の『願生偈』が『無量寿経』の優婆提舎である意味を、総説分たる『願生偈』の文句を解釈しつつ明確にしていたのである。

恰も『浄土論』のこの規模にならうかのように、親鸞は曾我量深師によって伝承の巻と了解された『教行信証』の前二巻、「教・行巻」において、自らが帰した誓願一仏乗たる浄土真宗を、露堂々と表白する。その朗々たる表白は「正信偈」に伝承の教説を総説するような形で、詩的表現をとった蔽密さという独自の表白に昇華し、さながら『浄土論』における総説分である「願生偈」を彷彿とさせる趣がある。

この伝承の券の中、例えば「教券」冒頭に、

「それ、真実の教を願さば、すなわち『大無量寿経』これなり。」(『真宗聖典』一五二頁)

と、一種の宣言の響をもって表白される一文をみよう。私にはこれが、「およそ真実の教えを求めるものは、来たって真宗興隆の大祖法然上人の、念仏往生の教えを聞け」というふうに響いてくる。いうまでもなく、親鸞にとって最も身近に、そして具体的に仰がれた真実教は、『歎異抄』第二章がはっきりと物語るように、端的に念仏往生を語る法然の教言であったからである。その教言に値遇して念仏往生なる仏道に帰した親鸞が、まさにその念仏往生という一道に立って、これを誓願一仏乗として開顕しようと志願する本願の論たる『教行信証』においては、この教言を法然の名において語らず、教主世尊の教えに帰えして、念仏往生を如来の本願として説く教主世尊の『大無量寿経』として顕揚したのではあるまいか。このように尋ねて来ると、『教行信証』の本論がそこから始まるこの一文をもって、親鸞は遙かには教主世尊に、近くは有縁のよき人法然に、応答しようとしているのに違いない。してみると、この一文に秘められた親鸞の密意として、「この論を、よき人法然上人に捧げる」とさえいふべきものがあったのだという

てよいのではなからうか。

これを承けて、己証の巻と理解される「信巻」以下においては、親鸞は「別序」の、「ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閲す。広く三経の光沢を蒙りて、特に一心の華文を聞く。しばらく疑問を至してついに明証を出だす。誠に仏恩の深重なるを念じて、人倫の呿言を恥じず。」(『真宗聖典』二一〇頁)

と、その思索の道程を語る表白を述べ、更に、

「問う。如来の本願、すでに至心・信楽・欲生の誓いを発したまえり。何をもつてのゆえに論主「一心」と言うや。」(『真宗聖典』二二三頁)

という問いに始まる、いわゆる三心一心の問答によって、聞思という親鸞の独自の思索に、厳密な内容を与えているのみならずそれは、親鸞の聞が値遇し、帰し、朝々と表白したところの、大行に帰した誓願一仏乘なる自覚道の、掘って来たった深い源泉に尋ね入る趣をもつた、根源的思索である。聞法によって獲得した一心帰命の自信心という事実立って、その信心の智慧の自証するところにおいて、その掘って来たった因位に尋ね入り、自覚の明るみにもたらして行く。このような探求の思索である。一心帰命という衆生の信心の事実的自覚に立って、遂にその根源に、三心なる如来の願心の発起と成就して行く歩みを推求し、そこに衆生の信心をもって如来の願心の廻向成就を自証したのが、このいわゆる三心一心の問答の重要な内容であるが、ただこの問答は止まらず、一般に、自らの信仰的自覚の事実立ち、それを卒直、正確に表白すると共に、更にその源泉、その根拠、いわゆるその因位を本願、即ち法蔵菩薩の願心として推求し、探求し、道理をもってそれを開顯して行くのが、聞思という親鸞の独自の面目をもつ思索方法ではなかつたであろうか。そしてこのような思索によって、『教行信証』は本願の論としての実質を実現し保持し得て、遙かに世親の『無量寿経』の優婆提舍たる『浄土論』に呼応し、相応する質を持つことができたというてよい

のであろう。自らの本願の論を、善導の、

「一字一句も加減すべからず。写さんと欲わん者は、一に經法の如くせよ。応に知るべし。」〔『観經疏』『真聖全・一』五六〇頁〕

という確信的断言を彷彿と想起せしめる、

「誠に仏恩の深重なるを念じて、人倫の呷言を恥じず。淨邦を欣う徒衆、穢域を厭う庶類、取捨を加うといえども、毀謗を生ずることなかれ。」〔『真宗聖典』二一〇頁〕

という、秘めたる確信を語る言葉をもって結び、虚心の権威を主張しつつも、遂に「優婆提舍」と名のることがなかったのは、あるいは愚禿なる末代の仏弟子の卑謙であったのだろうか。